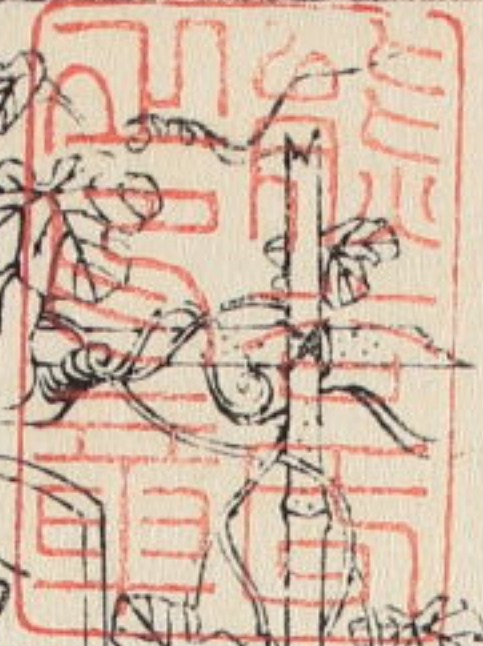


繪本豐臣勲功記

三編

十





繪本豊臣勲功記三編拾之卷

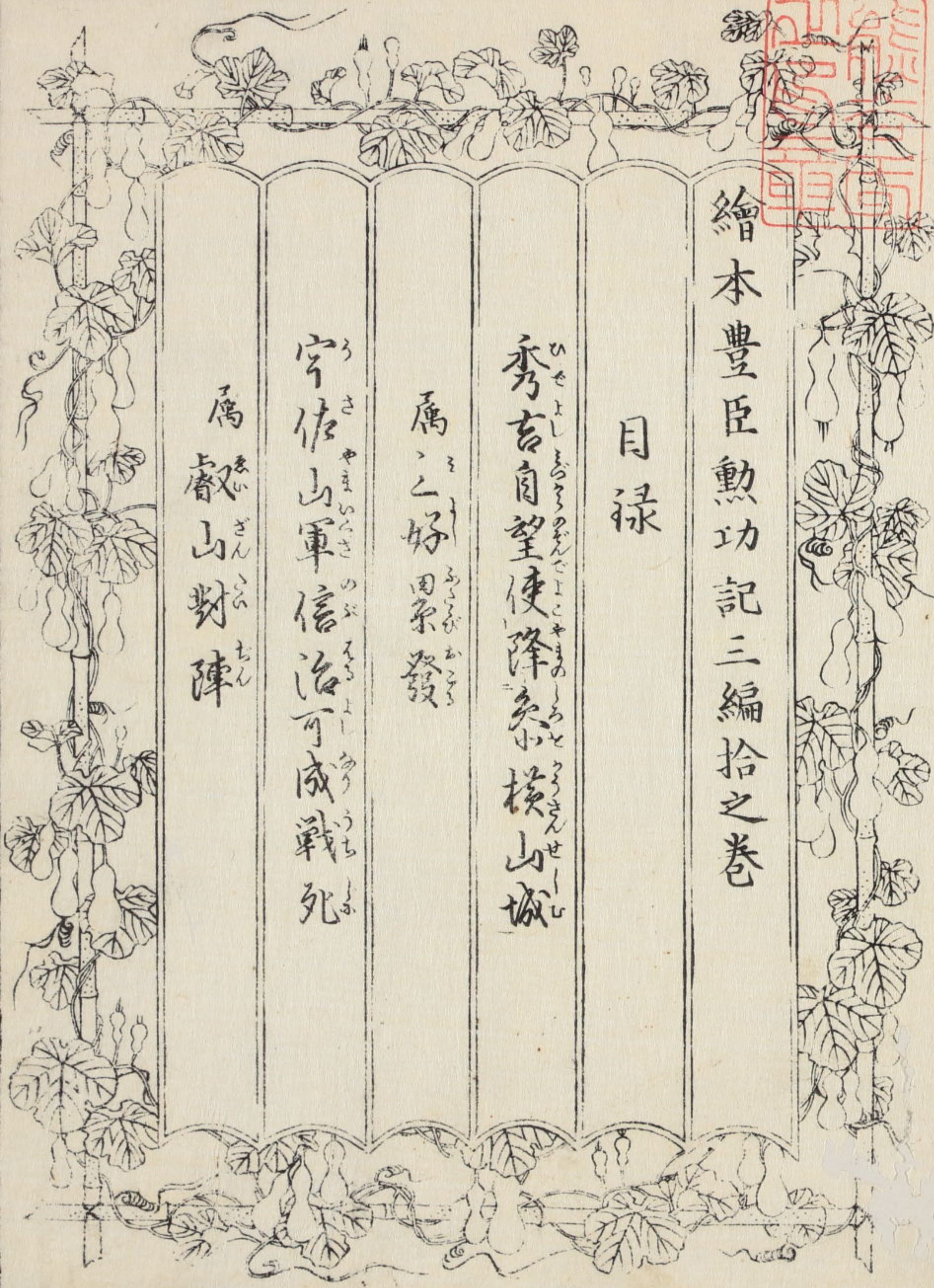
目録

秀吉自望使降系ひせよしもちきつらんごよこやまのしあせ横山城うらさんせ

属ま之好田系よこがた發はつ

宇佐山軍信治可成戰死うさやまのいんさのぶるつしあかうち

属ま敵山對陣あいかんたいじん



Vertical text on the left edge of the page.

秀吉親兼復鎮諸所一揆

属 賢田合戦

坂井政尚戦死豊堅田浦

属 秀吉献謀

繪本豊臣勲功記二編卷之拾



江戸 八功舎 徳水刑補

秀吉自置使降糸横山城属之好累起

瓶を井よりいされとのり。井小隠の聲あり。大寺は法達人の  
謀計の套小隠らむ。然バ木下秀吉ハ主君と交持謀まじも  
用ひて帰陣と定めしむ。藤吉郎のそ嘆息して。割を甲斐  
より事小思ひ遊く東へ出るや。金沢陣と決し玉をこの  
地の行跡大事小ひ。遠遭得く新出馬あつて。諸軍新骨陣牙を  
新勝利を得る事。是等閑の義小あらむ。然るに遠来新帰  
陣あり。諸軍の功劳も空しくなりて。遠遭の勝利も消ゆる道理  
その功劳の減せざるや。横山の城を攻臨し。自軍の益を能く

たる自軍十萬は勢小比まへ。横山の城は真小是か城小は  
 咽括めて。敵をこれ小凝ちて死に今般の如く自軍より数日の際  
 攻まるといふも軍卒評多換傷のこ小く。容易は城のこまじ  
 備彼城を攻めて自軍の益士を稠立せり。浅井の為小心腹の  
 病とありて自由を得て自絶と固窮小なるべし。遠后再び小首等  
 を攻る小を双の助力あらん怖く小居小。余じふも一隊をりて  
 暫時小横山を攻陥さん。然るば所帰陣はなをこも所得利より  
 うるべしと言状を小信長も。餘小もとおかしや。なをば汝厥量  
 小思起るば横山城攻の事を任まへ。隨ふ小せよと宣ひる故  
 本下飲び時刻を料まふも日中時刻あり。薰風より林野  
 小満く。天漸く涼氣起諸卒も大ひ小休息。はれが。竟

の駒ありと自辨三千余人と率し。繞進で勃然と横山城に  
 了。當城の雁守小八織田信包丹羽長秀を捕ちこんでまは  
 ぶも滞陣の術あり小より。脱小本陣へ率返せし。六城中又小  
 降し。まて今日自軍惣敗と有り。決も當城保護得まじくあり。守  
 圍らむ。敵をの退け。こと。じうもりつて。討。こよと。おひ。小。本。下  
 秀吉。二千余騎。強子泰山も。踏破。小海も。埋む。を。う。り。の。威  
 勢。あ。て。臺。地。小。推。進。来。り。横。山。の。面。圍。子。隊。伍。を。固。め。大。に。威  
 つ。ら。う。懸。城。を。軍。と。怖。さ。し。め。攻。撃。ん。と。ま。る。威。を。見。せ。た。れ。ば。城。中。の  
 軍。們。葉。の。如。く。強。硬。ぎ。動。搖。々。と。守。將。大。野。本。土。佐。也。又。橋。不  
 敵。の。勇。士。も。ま。も。此。も。屈。せ。ず。諸。士。を。懾。し。所。詮。稱。え。ぬ。陣。頭。降  
 ぬ。ま。へ。門。に。必。死。と。覚。悟。し。骨。肉。を。極。め。防。禦。さ。し。契。く。段。死。せ

木下秀吉

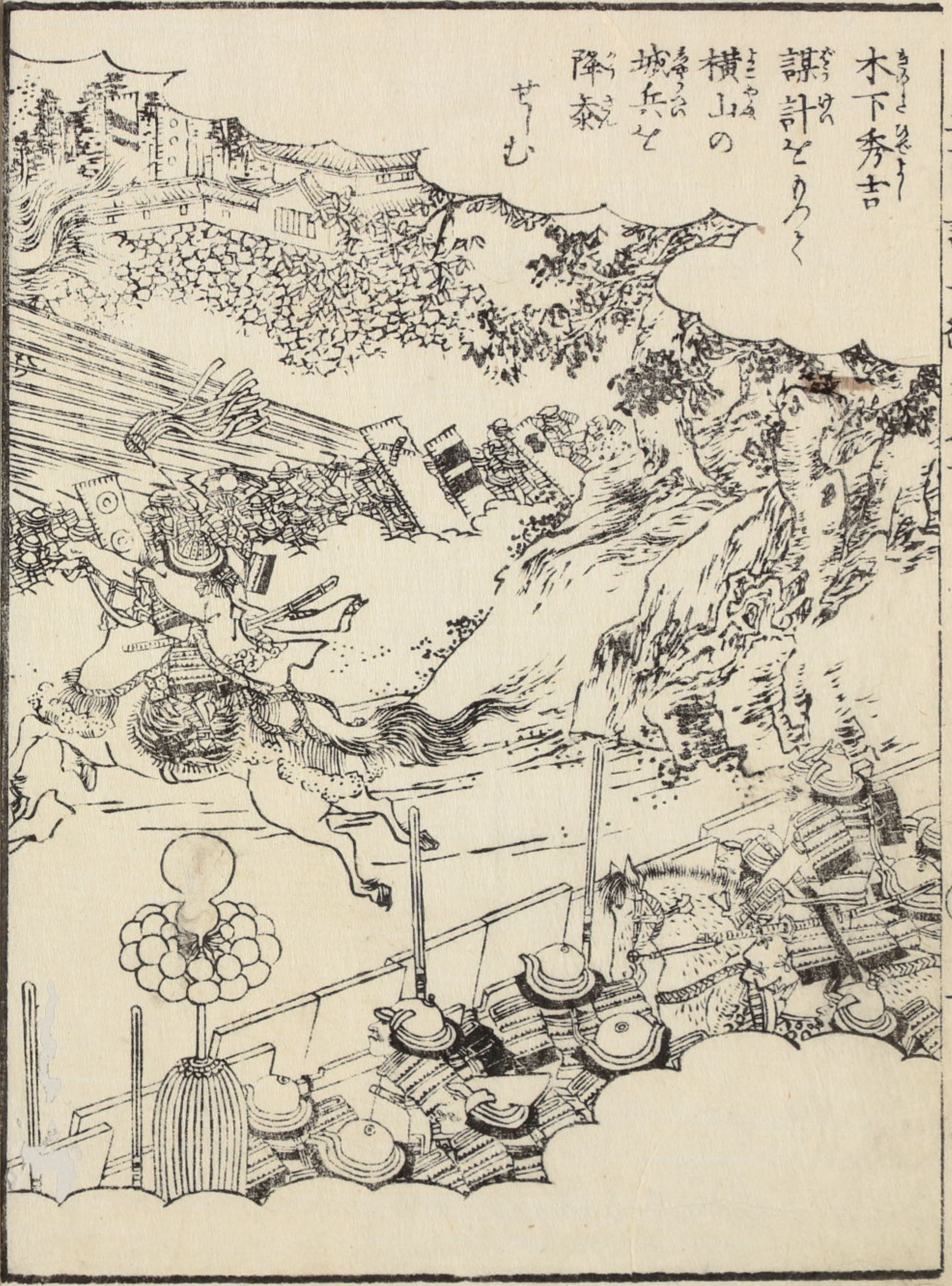
謀計どりく

横山の

城兵と

降参

せむ



上ノ道まぬ余なれば思ひの倍小戦ふ。次死するこそ本意なむ。  
 と勇氣を合はせて重きと小ど。田村野村も遠義も同ト。倍小とせ  
 繞りく。覚束なくハあり。道まぬ不と聞て是非を防戦  
 の備部をささんと。無るに本下藤吉原ハ斯の如く威を志ぬし  
 城中の徳と聞あ。一塔恐怖の容子あり。落び防戦と聞ある  
 由へ秀吉頼小を意を察り。攻臨さん事難き小あふねど。必死の款  
 を段ん小自軍も幾多換亡と下。城小自軍の有とあふ。バ  
 實小十分の利あり。このひ情。地小計強と徇謀。惣横山  
 の城下小推させ。城をつら島流を激蕩攻蕩。徳をひるれ。  
 城申もこまを防ぐんと。炮矢を健く候。後秀吉ハ故意引隔  
 りし。後陣の中より馬を跳らせ。正一門地小馳来り。魁隊の云ふ。

返。決して攻ること勿き。信長公の命あり。大音声小拵横され。進  
 隊の云士膜拜して。小退き。勅め。秀吉面圓の面風。到り。例  
 の如き。大音揚て。主將小一言。重きことあり。對面せんと。呼をり。大  
 將大野木土佐も。門の寨樓小露出。何事小。同ら。本下被方  
 を膽作て。謂や。淺井。船倉。敗軍と。外方小援助の勢も。み。  
 然る小當城。不怯ま。守城せら。勇氣のか。感む。小又  
 余りあり。然るが。淺井。父子。滅亡。城を守り。戦死するも。尤な  
 る。道も。久政。長政。今日。な。事小。小。城小あり。ま。小。下  
 倅死を止り。再。忠戦の事。ハ。か。蓋なき。城小對。激守り。  
 多くの。殺卒を。勞せ。徒換。せん。の。不。簡。ハ。形。小。拙。死。取。好。ら。ら  
 ぐ。や。信。長。事。より。忠。士。を。憐。む。る。者。の。勇。氣。を。感。ず。無。道。小。せ。め

豊後志三編卷之十

隔と事と好まず。城を穿ひて小宮小降らば。殺卒一個も傷まらぬ。退  
 うせよとの命せらる。登く防濟を止く。退城あきと叫せり。れが城を  
 們所く悦ぶと大野本一個同心せむ。是ハ敵の謀あり。今日軍を  
 痛まらる。日へ静力を勞せ。城を兼取。俺們飄く。退く。不を敵  
 んと計る。ゆけり。汝等心を惑さる。ひとと。殺卒を烈まし。殺  
 めて。后藤吉部小巻づくのふやう。主家さ。浅井滅亡あり。用  
 城と。これ事もあらん。久政長政存命。退けとのふ指揮も  
 みた。小行を後して。常城まぐる。敵の固を。何十万攻。このふとも  
 怖る。事は。出佐ちが。眼の活さ。うち。退うんこと。思ひも。うら。と。荒を  
 殺ちて。罵り。る。に。ぞ。木下。が。勇士。傲大。小怒り。固兵の。極威。見せ。つけ  
 て。忽。破。徹。塵。ふ。な。く。れ。んと。加藤。福。海。行。相。極。尾。傑。氣。盛。ん。の。壯。士

軍。城下へ進。つ。と。秀吉。制止。し。落。び。大。野。本。小。う。ち。對。ひ。海。も。忠  
 義。士。と。な。り。ひ。小。臆。病。未。練。の。不。義。士。を。織。田。破。仁。義。を。厚  
 ふ。と。救。奥。小。む。と。れ。汝。候。を。助。け。還。さん。と。お。お。し。め。を。小。そ  
 意。小。肯。た。退。城。せ。ざる。倘。當。城。を。出。も。せ。ば。害。せ。ら。ま。ん。と  
 又。と。怖。も。吾。む。緯。の。臆。病。こ。よ。然。と。て。此。所。小。段。死。せ。ば。徒。死。小。し  
 て。浅。井。の。為。小。い。ひ。と。も。重。な。し。遠。義。を。知。ら。ぬ。ハ。不。忠。不。義  
 士。と。謂。つ。べ。真。の。丈。夫。の。心。さ。か。敵。傷。く。攻。圍。む。と。も。厭。と。此  
 散。ら。し。と。通。ら。ん。と。こ。そ。な。り。ふ。べ。き。目。ま。さ。敵。を。圍。ま。り。と。仇。ん。ぞ。が  
 進。小。撃。て。殺。ぶ。と。い。は。れ。と。こ。づ。の。城。小。引。籠。り。し。つ。す。も。無。事。なら  
 ん。と。な。り。小。思。魯。さ。而。詮。汝。小。容。話。べ。う。と。城。中。多。く。將。率。候  
 信。長。の。仁。心。目。ま。さ。主。家。の。こ。め。と。か。り。ふ。小。若。ハ。退。ま。い。と。こ。づ。一。意

豊後言三 卷之十

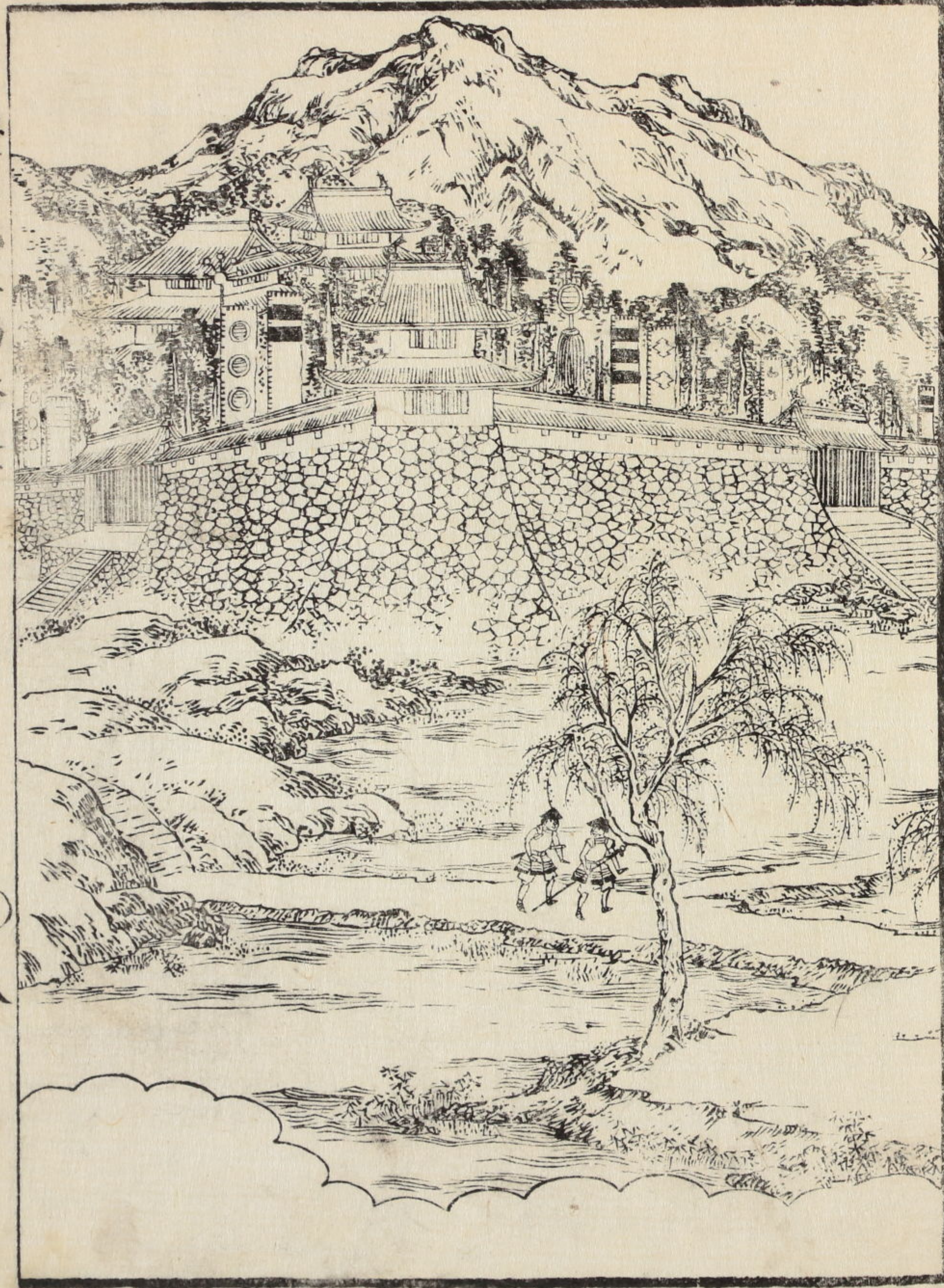
弓矢神も照然あまは遠去の途中を妨拒など鄙怯の舉動  
もをべらるる大野本入の徳病神中。諸人の災過を招く  
ことうんと呼らるる小塚兵衛の退去をなさんと動揺めたる。然  
ども大野本入本下小塚ゆらまて大小賤り。論少ら及下を儀  
あらバ穀子て出く散散しるまんと。之百計の公士を従へ奮發  
しとぞ沖出る。秀吉斯あらんと察しる由へ故意悪口はしる  
が果しと突發せしむしと。勇士小指揮しと推損巻散く小攻起  
し。六國をなりと思の外加藤福海の勇猛士怒氣を言めら  
ず。降参を秀吉を祈るち約束遠す。城を一個も害せしむる  
小岩へ帰さしめ本下諸勢之千余人横山城小投代り。この  
趣を信長へ云仕せし。織田破殊小沖感あり。當夜ハ姊川は  
東場小宿陣あり。翌日九日愈降陣小変せらま。本下が  
重をたごとく。横山城小將士を置んと彼をを益を推ぶとい  
ども敵城小岩小迫死のまゝ越前街道なるも。小塚常の  
倫輩小守りしと思ゆされ。誰とと當面もなまさまごとく。城  
漸思慮ありる。秀吉は外あまは。別や渠が望小く。城と  
取。も本下をば渠小守將を命ど。て。頼て秀吉を。所  
遠達を命出さま。に孫吉角兼所備小居小命せし。ま。長  
城と兼帯しと守護つらんと。重をたむ。信長大小を悦あり。侍

降参を秀吉を祈るち約束遠す。城を一個も害せしむる  
小岩へ帰さしめ本下諸勢之千余人横山城小投代り。この  
趣を信長へ云仕せし。織田破殊小沖感あり。當夜ハ姊川は  
東場小宿陣あり。翌日九日愈降陣小変せらま。本下が  
重をたごとく。横山城小將士を置んと彼をを益を推ぶとい  
ども敵城小岩小迫死のまゝ越前街道なるも。小塚常の  
倫輩小守りしと思ゆされ。誰とと當面もなまさまごとく。城  
漸思慮ありる。秀吉は外あまは。別や渠が望小く。城と  
取。も本下をば渠小守將を命ど。て。頼て秀吉を。所  
遠達を命出さま。に孫吉角兼所備小居小命せし。ま。長  
城と兼帯しと守護つらんと。重をたむ。信長大小を悦あり。侍



あつて彼城小瀬中のはいつとをかひと難不きせりつとあつら  
 さぬ小口馬も氣の毒なりしが中護をえんと神妙なりつとあつて  
 と宣せしむと小藤吉房評謝せしめ新芳煩むつと小長止護  
 うハ浅井家父子小園竊なきを此のち攻易きやう小使りあらん  
 と丈丈小栗詰栗しつと。借又本下が勅め小より磯野丹波守が  
 凝ちつと。佐和山の懸守こして百と首敷小城を築き丹羽五郎左  
 衛門守將とて遠城小籠置を外小方尾末山の岩小常松  
 九角たきつ南方佐波根山小水野下野中。西は方彦根山小河原  
 上へ交と對瀬中を築き磯田殿惣軍と引率を。岐阜へ  
 新降城まじぬつと。徳と本下孫吉房の自懸一千五百除隊小  
 と。横山の城小指籠る。借亦長深江城申小竹中半兵衛と

城代と。浅野孫兵衛を當副て是も同く一千五百籠測虎  
 窟を守りむ然かどに浅井備前守長政の令般姉川の令  
 戦小うち輸自方の諸士歳多戦死す。朝倉勢と遠く小森  
 さして逃帰しつと大勇氣を扼ぐと願のあらむ横山の城と  
 攻陥さしと敵の有とささしと。甚驕情の事小おひ取久さん  
 こと歳遭う。攻揺うとといふといふも守將ハ名小負秀言されバ。  
 進名却て換むるのこして攻陥を期せりしつと。是拒むるその候  
 捨置るに本下却て不意小撃殺小谷を色と散く小礼婦  
 放火して敵を怖し。飄然とて遠收こと遭くあり。こまごめ小  
 浅井勢憤怒を發しつと攻まごも。猶こと能くを羅小りて。敵の國は  
 受小す。四圍小ありつと。好の一族を兼本國寺小敗小して。



三好の一族  
 再度  
 出張  
 野田福島  
 若と結構と

〆〆  
 〆〆  
 〆〆



豊臣記三編卷之十

七

朽懐くかりきりとも為つた術もあつたりしうの時節を見合ふと  
 ろるが浅井朝倉信長と合戦小及ぶと所時こそ宜き事とて人衆攻  
 よつた評強しつる小之好日向重しつる中再度の軍小利と  
 しひ違ひ四國へ復還すること縦令獲つた利ありといふも是と  
 従事終つるべし如く括別の地利小接く安憑は若と構へ  
 志は小瀬守て京都を窺ひ或は進ま或は退死機を依て軍を  
 志すつる多くの自軍の利とならん將も石山の本願寺に於て  
 信長と不化をまひ渠と若擔らひ公糧等の助力をえんふふは  
 又否とい謂べしを今我倫軍蜂起せば浅井朝倉が勢威も益  
 強くなりぬべし織田一方の勢を以て四方を制する事能くを困窮  
 せん緯必定ならん今その若と築くつた要害地を考ふる小括別

△流布本  
 野田の  
 津川の  
 津川の  
 津川の  
 津川の  
 津川の

野田村福嶋の沼多くして馬の進退自由ありて南の小津川と  
 常比背方の海小連綿とまひ四國の通路心の随あり彼所小若と  
 築成し俺們若び出軍せば信長定て推進来らん厥を殺不  
 小引受く防戦數日を送るう小浅井朝倉一謀ト合せ挟んで信長  
 と撃つたの勝利を得んこと易くべしと理責て説くおを若この  
 議小因トらまは同業七月廿七日一軍三千有余人野田福嶋小  
 出張して要害の若と丈丈小構石山本願寺へも怯遣はし自軍の  
 事と云送る小まづ公糧を援助せらまぬ是小よりて之好の倫輩  
 勢威強大なりつると畿内の騷動大方を退く岐阜へ注  
 伸しつるは信長こそを所し遠般こそ之好の叔軍糧を新  
 枝葉と括し盡さん早く括別發向せよとて陣徇嚴なりつるに矣

合此と死捕  
其具不  
ちふく  
撃入た  
定本流  
解を

濃尾張伊勢近江之河の軍を都合之方五千余騎同八月廿日  
 の登朝濃羽羽原を進發あり直地小上落ましくして將軍家小  
 謂し多ひ之好誅伐の事を言仕たり。公方亦小上河後より  
 河出馬ましくして信長直小摺別へ發向ありたる程もさく公方  
 家小上河出馬ありて摺別申島へ下向あり之好と合戦小及び  
 之遠响石山本願寺より。淺井朝倉の両家へ使節し内  
 謀と止め遣はしする。是の捕具種々淺井長政も信長大坂  
 出馬と所より响まき遠方より軍馬を發して都へより將  
 軍かむ信長を被撃小攻べるとかりふ機會より石山より内謀を  
 告來りしより歡び聲力を得て早速越前へ使を遣りし  
 之好蜂起の事小上歎小際たれば機會なきに淺井朝倉一隊

小あり直地小京都へ攻より。信長の帰路を毀りたると必  
 猶利よりさあひび早く河出馬をなるとなりと類小催促はる  
 由朝倉義系評後より小系鏡進出遠義ありとも至極な  
 り。速小出馬ありと山崎魚住信長とも小勅めりる小より義系  
 小も然く準備をべると長政の旁へ諾答たり。まづ先陣を  
 操出さんて朝倉式部丞景鏡を大將とし魚住備前守山  
 崎長門守一萬餘人朝倉中務少輔系恒河内波賀之常高波  
 孫右衛門一萬餘人二陣とて互に懸同トく一萬餘人同九月十日  
 一系谷を進發す。備前と淺井長政の朝倉義系に對しては所  
 君臣とも小勅び鏡を直地小を馬を調へて四千餘人を之隊と  
 たり。十四日小谷を出馬し。坂本石室小系陣を十五日小

倉持淺井と一隊小ありつる由へ勢威を高く、（元）洪大なる人比叡山の  
の僧徒依り元來朝倉と親しむる由へ今般支家の出陣を  
歎び奔走せしむる將佐となる。こもがこめ小軍威のよく莫當

宇佐山軍信治可成戦死馬叡山對陣

疾疢狗彘小起る响の稍止舞を煩をもと比をこもがこめ織田の敵を  
あつ。淺井小費りて諸勇小及がを。その頃當國宇佐山の城小ハ  
信長の舍才織田九郎信治小森之左衛門可成と副らる。見  
まの森が部將出。青地後河守武藤の弟右衛門能田玄蕃同彦  
右衛門依藤正宇佐山の城へ遣されんと。横別より逆さまなる小登り  
も淺井依坂本小出張り。加勢朝倉系澆同景恒と評定と

まら宇佐山を攻屠さんと。獲率せりて。推すを。小森之左衛門  
撃て。祭壇く小吹捲り。幾多毆捉く。退入る。こもがこめ遠く。逆返  
り。城をのり。別勇あり。と。戦果は。甚なる。を。無が。両家の。勢と  
り。つ。攻陷さんと。その翌日。淺井。備前守。長政。三千余騎。小と。居  
法の濱より。推進せり。朝倉。勢。六千余人。河野村より。馳。薙。信  
二子の。名士。せり。て。對。嚴。守。る。宇佐山城。九千餘騎。少く  
攻んと。討。是。乃。及。ぶ。つ。た。こ。め。か。り。す。ま。を。然。る。小。可。成。奇。兵。せり。て  
再び。進。る。敵。を。撃。んと。森。ハ。一。千。余。騎。を。率。一。宇。佐。山。街  
小出張り。丑面を。路の。左。右。小。仕。置。る。流。あ。ま。と。取。り。こ。せ。早。志  
ろ。と。謀。合。せ。ま。る。五。百。石。堀。を。り。て。街。に。離。り。て。備。部。と。り。待  
小。程。な。く。江。敵。の。軍。雲。霧。に。像。く。推。進。し。る。森。が。後。支。家。小

相違し。初大軍をいかりし。小思ひの外と。猶緒の懸あり。こたふも本お小違と。武功勇猛の士あり。此も。座せを自軍と懸はし。敵の懸を待たし。朝倉勢こそ見て。森が小勢と。げなく悔は。之陣系境。軍を軍。自他も小懸を争ひ。只一掃小と。攻着ると可成。姑く。遮戦ひ。し。り。輪て。退ど。バ。ひ。れ。ひ。稠。ぐ。朝倉勢。単。得。急。小。推。近。来。り。暮。入。小。せん。と。進。り。る。可。成。二。と。な。取。て。返。し。戦。ふ。く。走。り。り。と。敵。を。い。り。く。猶。小。小。情。号。の。際。ま。を。引。着。ら。る。本。林。こ。た。あ。つ。時。分。は。し。と。情。号。の。一。砲。を。ま。を。ま。た。右。の。仕。勢。一。方。小。参。り。雨。は。像。く。小。を。流。撃。撃。寇。威。と。吐。と。つ。り。し。を。小。隊。仗。と。交。系。し。て。退。寇。さ。る。朝。倉。勢。不。意。と。う。ま。西。小。働。び。東。小。倒。是。散。乱。さ。る。と。虚。を。取。ひ。ま。を。控。返。せ。と。可。成。一。声。活。く。呼。ま。り。て。さ。う。さ。う。一。番。小。執。く。返。し。

長棟の陰を雨降を懸は像く小突起く。激殺をまぶこたふ。後依の部。黨。道。宗。法。十。部。同。助。十。部。尾。孫。源。内。同。又。八。部。會。究。強。の。勇。士。達。主。人。小。劣。ら。を。捉。え。返。し。倭。僮。の。敵。を。絶。破。地。小。棚。仗。く。息。と。も。續。せ。と。攻。着。は。ま。未。練。小。崩。是。し。朝。倉。勢。散。く。小。あり。て。敗。走。と。森。が。自。從。一。烈。小。喚。叫。と。趁。寇。く。敵。を。殺。こと。無。數。を。過。淺。井。長。政。こ。ま。と。見。て。敵。は。奇。も。是。迄。から。ん。強。を。と。り。て。推。返。さ。る。城。を。取。ら。ん。こと。易。う。ら。ん。と。い。ふ。と。景。鏡。も。理。あり。して。系。恒。が。強。を。當。向。さ。る。本。林。可。成。の。旁。候。既。小。朝。倉。一。隊。を。破。ると。い。ふ。も。敵。は。大。軍。あり。な。れ。バ。強。兵。の。来。ら。ん。事。を。察。し。退。返。さ。ん。と。さ。る。中。勢。小。陣。系。恒。山。法。長。門。中。吉。家。魚。住。備。前。も。景。固。候。之。千。余。騎。隙。際。も。あ。ら。せ。と。退。来。る。に。可。成。之。後。捉。て。返。し。

豊田記三編卷之十



宇佐山の  
合戦  
森可成  
殿を



豊臣記三編卷之十

十二

風虎の荒原を走るが像く勇猛活く戦ひるを武勇功者の流  
 長政之千余騎小てた小開き森が隊伍の横際より一團小隊を  
 投る小ぞ戦勇は城兵們兩隊の大敵志のたぐく隊は債く小  
 見へる唇を長政系恒得るを諸將を勵まし捷起く突敵  
 さんと表く地やどに寡兵の多勢小敵くく戦屋して敗走を可  
 成固く踏止り。彼率們を退せんと老黨數十騎前後小従一敵  
 の大勢を引受く又怒を散て防に戦ふこま小よて敵兵も  
 果多敵捉獲を員せこまご自さもあま戦没して之たあつも  
 多く傷死偶々ぬららも血戦さるうち諸率大半城中へ入る  
 便可成方僅ハ意寧しと探退小むた退に城門近くする程小  
 敵退すること火急なり。初ての者投小せらるる。遠大軍をむた

うけて助るべしといふを五遠場ふく戦死せしを除小を  
 城中の分機さびく。防索の備全して容易落城とあつと  
 覺初し。その城中心使を走らせ登く保道と老重小備  
 敵を防々の準備一玉一吾の遠場少敵士と裏登一殺死とて  
 と粟送り。敵等殺卒五百余騎小て退來。敵の心中動怒と  
 して沖て投東西小強起南北小馳援命小掛念あらは從懸休  
 天朽も怖まこま千雷万化の戦ひる中やも大将可成ハ敵を  
 殺十騎昂地小擲休みかも多く小敵を負せまも敵意一の概  
 とうけ黒糸敵も細い小深赤霞陰折馬も覺まれば方儀ハこま  
 まぞありたりと敵を四方へ退散し。手速く澄ぬた捨く腹十人  
 字小斬逆し。死しつらるるを森が老黨尾懸源内因又入道



△森可成の八幡殿の六男志保冠者長隆の子孫千代英法の侍人松後幸左衛門の嫡子あり

家清十郎同助十郎依主人の戦死小殉死をべし。と我もくと歌  
申小延授おのひの森小梓果せたる亂軍小戦死し森と左衛門  
が今天の烈戦強小織田家の勇士かどありと諸人の耳目を  
愕し遂小城を敵小棄てるといふも信長將軍の期をえ  
たして半途小眞府の鬼とありし骨惜むる勇士あり可成行末遠四十八歳也  
時城中少の織田九郎信治武藤五郎右衛門青地駿河守紀田  
玄蕃允依還来り自害を助官左右のうち小森可成使を  
送りて城中堅固小守るべし。とた忠つて敵を拒抗戦死せりと  
是よりしり信治大少愕嘆き森と戦死をせり我すも舎見信  
皆小再會えとれ面目あり城を打出救るべし。と勇氣烈しく  
騎出を武藤五郎右衛門馬前を遠り命せり理至極みごと

今尚撃出さぬひらびりて敵小着投せられん。とた忠つて切りし心も城を  
大事と思ふてあり。只可成が教ふ小随ひ城をとりとせ玉へと所て九郎  
信治其方が朝も無事おとす。森へ織田家股旅の居あり。暇も小  
戦死とと所なき。救ひ小出さぬ腫病あり。怯忠臣を見殺しとせし  
むらむ謂まん事武士の第一恥づる義あり。縦令城を殘せとて  
信長おんを教ふべし。渠毀損せむ我もまじ活残るべき道やいと  
とて延出さんとせしむる。青地駿河守も馬騎出し。小居も然こそ  
おとす。と信治小従ふ。いざや可成を助けん。と自後とつる三百  
余騎武藤が練めとまじも用ひを義氣鉄石の像くふく。莫地  
小延出する。五郎右衛門も力なく。當城少の警がしと殘を制し  
止め。城門を濶固め心強くも撃撃營を防衛の備をあり。小居も九郎

信治青地と借小二百余騎と急難小備へ過巻歌中へ沖指り  
 るに意を可成戦死せし後たまた信治大少悲しむ難き勢  
 と頑く覚悟のありしも同族小段死せんと當るを壁使  
 小次郎龍正極死狂小戦ふ。遂小戦死せられし。後河守も  
 遁まぬ所と死地を隔てて斬死せしむ。あまた小津井船倉  
 両家の名士戦死。船員美らふ小次郎累にされど遠圍せしむ  
 城を敢らんと尋地小推考を二を三小唯一謀小と改起る城小  
 武藏紀田の門よく防戦せしむるふり。弱る氣もあしりしむ。  
 一端少の攻隔さまた。米場の捷を得て長政系恒徳勢いと  
 纏め坂本の陣へ退返し。宇佐山少の懸念を殘し置羽日大津  
 の近急を放火と軍威をたぬ。近日京都へ攻とんと来たると

と收據別へ所は信長今此地小五陣ありしに敵を京都  
 へ入るとまづ横山へ使とせしむ。本下秀吉を信長は城陣  
 の難攻しむる小孫吉身奇計をりし九月廿二日小信長揚羽中  
 駕を河邊途ありて途中退殿小出ると好と散く小敗北を捕心  
 奥の指揮小周て撃て奪る石山門徒も本下が為小款殿を將軍家  
 小も織田勢小も道中を難小降浴せしむ信長少の鳥飼の色より  
 屯地小大津の方へ推進し。坂本へ向てを至ひしむ。  
 諸將の好の倫輩の退殿の軍儀様とて是も猶懲むる小  
 評定とて今信長の坂本小於く。津井津倉と對陣とて是も遠際  
 小京都へ攻登り。將軍家を驚とんと謀るといとも頑く秀吉の勅  
 小同て信長揚羽河邊陣の時伊丹長宗庫領池田元就後も坂本

佐渡も荒木信濃も堀川信春も何都々當國の諸將を以て  
 後般の事係漸時あり且まこと好右京右義継島山次郎等  
 政友人も河内の國若江高屋の城小をく之好保都(攻)登  
 背路を断つた事を謀され其勢を見せざる由へ之好保勿々攻  
 進る事あつたこととて宋へ德病神小魅らまじりて其軍の  
 々々帰國の準備せし十河條原東條安宅次等々小四圍を  
 當り帰帆しる小三人衆も力及やで甲斐々々も野田福等  
 の陣を拂ひしる四圍へと降りしやどに何時となく小松別院靜  
 小ことありしは是も然かど小信長へ擧列より朝が像く板平小  
 進るに淺井朝倉大少等其信長等も速地小退返をと思  
 も擧らむに從令帰陣不及とも之好の軍擧りしより進段

とまき候もさへ容易退くこと難しとあり小違つる今又いふ  
 九月十日の日のつまは候もこと羽翼を用て其るると怪しむを  
 そのものありを隊伍の整くはる緯へ威嚇種火小比をくして  
 壁とも頼と不見なまはるの鋒花小當りしと恐怖を事大  
 方ありしに慌忙き而家の軍比敵山へ馳登り陣が領坪を  
 善山を小陣を構へ防衛の隊伍とせしる信長淺井朝倉  
 が恐怖の態と河原ありて然こそありめと脱走せしは曉は九月  
 十四日比敵山に陣を圍む諸將へ徇く降く小陣部を令属ら  
 らる番取郎小敵山の要處を構置宋子監物長谷川丹波也  
 山田之たつ不波河内中丸毛堂庫頼丹羽源六郎水野小大  
 依せ稠を是穴を村の属城を佐久間右衛門尉津田東市正

豊田記三編卷之十

十

佐く内藏助堀本内徳明智十益湯苗木久益湯進着山城と後  
 孫と益湯原平次郎多賀新左衛門水井雅楽頼佐孫と左  
 中保將監依たり田中村六柴田修理進氏家入道下全  
 安藤伊賀守稻葉伊豫守まろ唐崎山津田と身た東門山岡  
 對馬守佐治八郎多賀依敷山の麓ある古城の蹟を再び構へ  
 津田之弟五郎香西越後守と外公家元と將加へ遠征城小  
 籠をせらる。諸信長の所本陣の志賀の城小定めり是連綿て宇  
 佐山小陣列せらる。公方家小もかどき二条と所出馬ありて東山  
 將軍堀小所陣あり是等と集せり惣堀都合三萬五千有餘  
 人種威山江小懸きて急磨り津井朝倉も歎對べりとい  
 見へざりたり

秀吉親兼頼眞諸不一揆属望田合戦

群蟻よく蝟斗と據小ありと悔ぶるを。頼て石山小懸  
 居せる楠正具が密謀ありて堀列江列の百姓半諸不一揆起  
 りとて公方よりと急磨り敵山小大敵ありは是等の小事小開り  
 得を一應淺井朝倉と攻潰さんと評議して一五日とを以  
 越前小ありり朝倉義家之可余勢少く進着石江列に  
 地小懸陣して上坂守佐木雅琴苗鹿の四五村小陣を列  
 連その威勢浩大小く。又魔も避る不見あり。是より大軍ありり  
 り小山門の衆徒一隊一隊と。堀波は十萬八千あり。是も敵山の  
 要害小懸堀と拙きて隊部した信長軍極多るといとも容易小  
 攻ること能はざり。急磨り又淺井朝倉好きて軍も發さざり。

かく評揮もろろごとく。徳無小目と送りたる。遠慮小島下の江勢  
 兩國の一揆半諸下の小城を礼務もろろ中、小龍は尾別勢カ助の  
 境なる長宗門徒們教百人一揆を起し。發動さゆごとく破  
 竹の儘し。これよりて堀川の守護人滝川太近將監一益度  
 是を割るともども更々小鎮もろろ知らざる思ふに。江別の一揆軍は依  
 本兼頼が指揮中と。益武を好む御民們織田家の小城を攻め  
 礼務狼藉せし响は。茲小丹羽五舟長秀を。百ヶ谷家の岩小立  
 て佐和山の懸をさりしが。頼より謀計を遠らし。佐和山の守將儀  
 野丹波も小時く降参の事と勅め利解せりて。頼も少く遠参  
 と丹波もも稍帰仕の色もろろ。毎度丹羽が方へ使者をやりたるも  
 信を通す。降参のせどといども。懇懇の際と云るぬ。懇に遠参

大將儀長下坂本小普陣と祈りも。形の時第一人おもあま。  
 馳加へる便宜ならんと。老黨江口右左衛門小讀を守らせ。五  
 百余人を率從へ坂本へ行人と歩數一。小一揆軍。諸次を渡り  
 妨らるゝ丹羽長秀。勇気五百と烈しく。あたま大小戦ひつるごとく。  
 敵を毀ごとく教を知らざりとも。數の一揆は。百四十方八面より  
 涌ぐやうに強き勢を起す。着纏たる小長秀も無事。滝  
 てを見へる。あまへ横山城に留守。竹中守重。滝一揆を割せ  
 んと。五の百の勢を率一。あまへ丹羽長秀一揆と戦ふと祈りも。  
 暴風の像く小龍進て。一揆軍は背後より。合釋もひさを掘起る  
 少く。一揆軍勢も。敵に。教一。多と長秀。敵は重治小附。これハ  
 竹中丹羽より。俵ひ定めく。坂本へ所出する。跡ハ。あまへ。

ちやく被石へ趣きよと勅めたる也へ五郎左衛門然ハ所怙恃し全る  
 里にて自燃せ率具一坂本の旁へ急ぎゆく竹中ハ一揆輩を遣  
 散し意静小横山の城小入り丹羽長秀ハ坂本小到り始終  
 の蹠蹠と云快し一揆輩は越中も持参しは八倍長其の  
 功と感し其の然れども斯まハ一揆の端ハ韓起しと強動をせしる奈落  
 懐の玉より遠く制をたやと所公成いある時木下進む言快なるこれ  
 御民の憐起られ怖るに望らばといども制をせんはあへくハ一揆は  
 の蔓うのそを根を折割する所ハ力と骨せばといども忍化静温仕り小  
 不存の之ハ三寸の舌成奮りて流石の一揆と謀中見今敵陣をゆか小  
 急ぎ六軍もまほしけれハ遠るハ方便を約のり人と密小明奉るも是ハ倍長  
 大小悦びぬ快討らんと命をなと小木下秀吉謀衛之準備を

一從兵五指余人を率列坂本を起く途と急げ石部山城  
 小ありむら佐々木兼頼小案内せし久後公軍を止めし  
 秀吉一個を城内へ容る木下直小本丸へ通り義弼中討小  
 兼頼小討面なし其れを資糧を施し一軍小義弼中討小  
 別以来疎遠の後軍事小暇をたるなり只顧赦免を乞ひ  
 参りしを先年小居當館の恩情を被りしこと此時も忘れぬ  
 らせむ報恩を思ふといども君小侍する身も不存小任せむ  
 今日来とつらう義も新舊未の國心澤と報むる端もならん  
 ちやくの義小いと重きをせ義弼所て昔も重なりやと云く久く  
 對面せし縁を恨むる程つかひいり足下の武名も當國小藏なく  
 仁義の行状を略所傳て後々小悦びぬ今日此入来ハ息無云

ころ事ぞ所をがしやと訊ぬると。秀吉落び雲霧らるやう遠き  
 入道殿へ言出せり。御得心ある小於くハ通互の變便なりを  
 ぬる。永禄十一年の秋公方家洲上流ましを機合り。信長使  
 節と達らきて。粟投る一條と。洲集結ありたり。止むことせ  
 得む公方は。め小合戦の事小既ふといども。徹も私義不能む  
 將軍上流の道路さ小田けり。小官一と。洲西折縁。當城小  
 ましませとも。遠方より敵せし事。此義をりつて。殊責されと。明  
 小知り。めさるへ。然るを猶も遺恨小おたされ。洲敵向をせ。あふ事  
 道たれや。小存まありて。故如何と。志と謂ふ。と好ハ公方家の  
 怨敵小して。天下の諸侯の志も是と悪す。ぬ族輩もなし。然る  
 小當家ハ將軍小も頼怙ある。方と思ふ。一遭洲身を據る。あひし。

以て三好小一味ありしハ。女道の挙動小い。ましまさ。とや。今ハ更く三好  
 荷擔の由あり。まじ。當國と素は像く。依く本領小執込さん。  
 おがしめり。して軍馬と。養一。あふならん。其一應ハ。理なき。信長  
 私欲の押領り。む。公方は命と。恭りて。當國の動執と。治めん。の  
 あり。入道殿小も先非と。悔。公方家小洲將佐。や。信長小力  
 と。勤せられ。忠勤と。錫一。玉ひ。お。退日。あ。ま。と。素は。如く。以。別。の。大  
 ち。し。む。び。一。懸。小。力。お。せん。と。一。玉。ひ。お。公。方。へ。故。を。る。不。義。さ。の。名。あり。  
 誰。も。是。と。よ。し。と。な。さ。る。も。一。齊。力。を。費。し。公。士。を。困。め。不。忠。不。義。の  
 名。を。取。る。も。そ。は。甲。斐。日。死。小。乃。び。て。ハ。家。祖。も。面。目。な。る。べ。し。承。領  
 洲。又。子。信。長。と。洲。和。睦。す。ま。ま。悦。喜。遠。と。あ。る。べ。し。と。こ。を。と。察。悟  
 し。て。あ。り。て。洲。家。の。長。久。を。量。料。ら。る。ま。ま。万。全。を。ん。ぬ。と。詞。約。く。利。解。分

六角兼禎  
過非と覺と  
使節と  
り  
公方  
家へ  
解失と  
稟と





羽小説着るる小ぞ不得の六角兼頼も後嗣を貫判り像く忽ち  
 軍悟し心と草め藤吉舟小敬禮して誠不足下の教りくんが  
 吾兼頼の速雲晴まじ憂喜し今日只今虚假の心と打棄  
 ぐ實意小公方家へ随逐せん信長公も首尾よく披発  
 と怖るまわらざる。と懇懇とつくく重し。小ぞ秀吉又小款  
 悦み。拙き小子が詞を容らば早速の御承諾へ使者の面目  
 照らす。國家の不幸を小過を念その御不存ある早々  
 御百姓侮へ其儀とよく徇せられ。御使者せりて公方  
 家も言状し。重と勧め置まづ信長小重所せ安途ゆさせ  
 重さんとて木下へ坂本へ歸り斯くは次第を言状し。近き小佐  
 木の使者来らん猶又一揆も承渡さんと待小程なく兼頼は

報使ごとく老黨之上伊豫也。之雲影た兼頼を遣えし執と起  
 と種々調辨公方家へ御禮重し。上人と坂本の御陣小到り信  
 長へ祝慶怖む。懇懇小重し。これバ信長も御満足の  
 態を直地小公方家へ御禮なさせ兼頼父子御將佐の趣  
 を言状す。御懇に命を被りて再び坂本へ歸り。信長へ  
 御報禮せ重し。別禮を乞ふ。人の石部山城小歸。公方  
 の發意信長の命令を詳小演る。小ぞ兼頼も急小悦せられ  
 早速國中御出。佐々木一統公方小随。信長と和睦  
 なし。小一揆。死ことなると。制止され。別一揆。皆  
 去。佐々木の領民も。忽ち發動鎮治。て。落び。礼坊の  
 たり。信長殊小大悦あり。大小木中。と感賞せら。ぬ。既小一揆

豊臣三編卷之十

十一

の發動の靜僅小及ぶといふも、淺井朝倉との對陣ハのつと限と  
 定めもなまむ合戦もせむと、徳川と目を送り、月を過ぬる小次  
 守小寒氣は時節となまむ、む益の對陣諸卒と勞苦せ  
 せんより、その目と定めて、有任の一戦と決せ、やと謂送るといふも  
 淺井朝倉はより謀て、織田勢屈して、退くを退段せん、巧  
 暖なまむ、退るもせむと、目を送る。信長今、任分なく、對陣の徳川  
 小徳来自由とみさん、と、瀬田小舟橋と掛させらる。橋の堅固と速  
 らしそ、植原新右衛門村井新四郎と當る、た右小月日推移り  
 九月より十月まで一陰一寒も、動くを對陣とのまかり、るも、織田  
 家の武士們、屈し、圍と、寒氣が中、も、比叡、尙小冒さる、こと、の  
 とも、な、む、れ、れ、急、と、い、ふ、も、も、自、然、と、陣、く、嚴、む、と、信、長

ま、ま、を、憂、ひ、ま、む、と、い、ふ、も、諸、陣、を、巡、檢、せ、れ、或、ハ、慰、勞、或、ハ、制  
 止、敵、小、退、屈、の、氣、色、を、見、え、る、傳、は、る、と、瀬、下、陣、濃、あ、り、と、い、ふ  
 とも、諸、卒、ま、む、の、軍、們、ハ、邪、風、病、氣、小、煩、ひ、悩、む、張、義、子、弟  
 小、見、ハ、小、々、り、茲、小、堅、田、の、任、人、猪、飼、甚、助、馬、場、孫、四、郎、居、初、又  
 次、弟、ま、む、の、者、あ、り、こ、個、情、地、小、謀、合、せ、信、長、の、將、將、佐、威  
 漸、陣、ハ、泰、り、と、言、は、れ、と、い、ふ、も、漸、勢、少、く、信、長、と、い、ふ、も、小、信、長、導、示  
 つ、ら、ま、り、越、前、より、諸、般、運、送、の、路、を、提、新、奉、公、祐、の、忠、勤、小  
 備、(京、さん)と、願、ひ、し、信、長、こ、も、と、所、し、ゆ、徳、川、の、機、合、の、何  
 を、も、思、ふ、ま、む、王、ふ、事、な、む、ハ、發、便、と、い、ふ、誰、と、遣、ら、ん、と、擇、ま、せ  
 至、ふ、と、坂、井、右、近、政、尚、進、と、出、堅、田、の、孫、小、孫、不、な、む、諸、將、も  
 多く、進、ま、れ、し、方、一、仕、扱、と、い、ふ、時、ハ、自、軍、の、威、勢、を、折、り、理、也

坂井の政尚  
夜中  
堅田浦  
龍襲ふ



龍襲ふ

五

然りいども猪飼候之人をむ死も指さし備小は小舎せられぬ。
 祭向て才を移小まを忠義を竭し重さん小と望む信を
 感悦せらる。時小右近(命せらる)御月付こく。織田甲
 斐ちを遣まらる。公士彼是一千余人別小佐餘の處とありて。
 遠公五百有余人頃十月廿五日。月なき夜奥小坂本浦より出
 帆。望田浦小着り。猪飼馬場候を案内者こし。
 浅井朝倉が公糧を貯る。望田寺へ推進せ。不意小うら。
 四角八面小難遠ま。敵公二百人をうり。遠地守り。
 是事小坂井が勇公小斬起らる。慌忙に逃散し。右近没尚
 軍費し。猪飼繞る寺内小入。敵の公糧を自公に不食
 と。諸卒小こを。願取この旨。小坂本へ。浪伸し。

掌を拍く悦ませる。坂井が武功と感賞せられぬ。義系長政の
 西將ハ自軍の公糧を敵小棄る。割望田も敵地となれぬ。
 小谷越前の通海を塞ぎ。往來自由せざる由。君臣共小
 ことと愁ひ。評議を。浅井長政軍中。小長。大將
 公。朝倉に諸將小告。謂や。望田(加勢)の来ぬ。
 の境ぬ際。壁使小自軍多増せ。望田(推進)敵公軍と
 段提らん。小徳利を得。望田各いふ。小舎せられぬ。
 朝倉武部。山崎長門。依遠義奇計。小は。先陣と
 願請。公(義系)も。小同。朝倉系境中。村重之助。候と大
 將。こ。二十余人。先陣と。浅井の勇。赤尾
 英化。同。勅。田。色。平。内。沙。井。新。九。郎。大。野。木。又。公。所。候。二。十。余



豊臣記三編卷之十

七



坂井右近  
堅田浦  
浅井朝倉  
兵糧と  
奪ふ

豊臣記三編卷之十

七

人少く大目世法下刻堅田寺へ推進る然る小坂井政尚も軍  
 事小熟る勇將おまは夜分の寺内を騎廻し。妻時がなとも所  
 々代々諸士と懋ほし。各糧を飽まを會ひ。焼火の燦くと焚連く。  
 寒氣も忘るをうら小おし。何時とも斬て衆人と氣力強勇小侍々々  
 石へ浅井朝倉の五千余騎前後を達く推進来る。蒐うを流うら  
 列ねを蘇小攻投らんとや々々を坂井政尚をじも發ぐを十分氣  
 を去るう。道急と率ひ撃て出朝倉勢を逐へられ。越前先陣  
 二千余騎融る。閉断とかりひの外。速疾小撃出りる。ゆへ却て不意と  
 敵を如く先陣破く。小あり々々と老練の坂井右近政尚自軍と指揮  
 と斬起く。単騎急小追拂り。速疾小斬て出をまう。小退揚て寺  
 門を固めく。勅(らま)に。朝倉惣案小相違く。大小取らるるとい(ごも)。

大勢をまは。猶怖まを。浅井勢と一隊のみ。再戦をさんと後陣  
 の勢を来ると方僅やと溪向りり

坂井政尚戦死豊田浦属秀吉執謀

劫小増減ありせり。て遙小是と兼をまは。天地をう。獲生死  
 あり。引や人小於く。を。然バ坂井右を政尚ハ一戦小欲と欲  
 一神速をとも中へ。退を諸衆小息を休めらる。所へ浅井朝倉  
 一隊小来て。寺の四方を推捕圍無降小發投らんと攻起。中  
 能く朝倉勢ハ示は。孤軍とをる。ぐんり。法と突とも斬とも厭ひ  
 なく。強越んとま。地蒐る。坂井ハ二千余騎を二隊小分ち。安を  
 中。途と防戦ひ。粉骨碎身。此のま。要隘もなき。寺中。事な  
 る。殊更。敵も大勢小。安。内もよく。知。ま。強。急の勢を。展。揚。す。

遠隈形隅より。素授んとさくさく小右近ハ双の極勇少て軍  
 慮小賢兒將士のまじり自己一生涯の偉名奮揚せんと決心  
 るその不謂ハ今來の夏姊川にて先陣と敵小斬崩さるをれ  
 さハ恥辱とあり小又のや自亂久死と被合戦小戦死を悲  
 歎小堪む借小死さんと歎せしるも老當の練小よりてそ  
 ち死ハ止  
 まりなきとも豫より愛し一子と失ひ世小頼憑なきこと小思ひ且ハ  
 臆病の名と受て尋常小死せん事ハ朽憾くいつ小も諸人の目と  
 疑うをかどの勇戦ハ戦死せんものと禱より懐友とりし機會ハ  
 まハ遠遭の軍後難危なりと知るが好望て来りし事あり  
 際後防戦捲靴ありと千騎が申より傑氣の勇名と三百計  
 張り出し門と開く突發ハ大勢は敵の心中ハ吐と喚と極り

扱た右を擲起る後と砲散し。經の像く續け像く敵討れ  
 とも喝ひく。面向敵ハ勇小信せく斬倒し擲落し死體と發して  
 戦ハ左右と相佐高等ハ坂井十助浦野源八同源二高見  
 といふ一騎當千あり倫軍主人ハ劣らむ血戦ハすそ外松原  
 場居初大將右近と敵と相と勇氣と懋は挿きしバ敵  
 大勢ありといふも遂小坂井小斬頼され礼起てぞ見(る)と  
 朝倉景鏡山崎赤尾憤激ハ諸卒を勵まし強兵をりて  
 展轉ハ刀怒と發して戦あり。坂井方ハ小勢あり殊小坂井の  
 軍小疲も中こそも寐もせむ尋常の兵士ハ斬大敵と  
 對迎く。斤時も堪むべき事ありぬと右近が軍質とけけら諸  
 軍士ハして大將政尚と死と受し極氣なれば小孫と歎







坂井右近  
 勇猶餘  
 前波藤右  
 衛門と  
 殿つ



怒り。立派にて荒々と突ひ貫くも敵小対も是より濃尾小種之儀  
 田沼家居小老功者ありと知らざる。坂井右近政尚あり對敵いさる  
 嫌なきと謂も果さずと撃て薙る。市波遠少く起向ひ他支もせむ稍  
 半向虎跳龍飛の術を竭し。千精義奮して闘ひつるが如何なりけん  
 孫右衛門右近の撃投右刀杖を拵換とて持る。後を潮血道長  
 く折さる。市波も右小平と掛ると脱せもそのを政尚が微塵  
 小のまこと段々小ぞ。孫右衛門避る小際も。免とのけ小勝負と  
 益耀とて次着る。両眼息地血小暎え。咫尺を視ること難しと  
 のこも勇猛を双の市波も是。暗搦小組着る。右をも左力を抽  
 棄て。喉とをく。咽喉を合を探合抱合か。遂小支馬が隙  
 隙小支。孫右衛門も痛癢といひ。臂力弱りて組布も右を小首と

投さる。政尚も別々の心神。果揺振やとく。自由ならず。四方とる  
 小自軍も悉く殺死。敵いさる。稠進も小進も再戦もなまじ  
 駛卒の子小薙らんより。潔く自害せんと馬上に儘小腹挫切墮  
 もゆる。小死さる。續いて目代織田甲斐守。坂井十助浦野源  
 己れもくと敵中へ強投かり。存分戦ふ。華々しくぞ戦死。遠  
 响岡崎の所加勢。望田浦小合戦ありと。所より。播小のり。馳  
 着る。小坂井政尚も既小戦死。後をば切。殘兵を助  
 なく。と。傷。敵中へ無二を。小突投。右横。小次。自  
 自軍は勇士。素原。平。多。安。孫。右。衛。門。尉。猪。飼。甚。助。係。と。を。い  
 中。一。戦。死。せ。ん。と。激。思。ふ。と。練。判。に。殘。兵。軍。の。三。百。計。斬。殘。を。れ  
 一。と。若。小。助。と。敵。中。と。強。出。續。く。と。て。還。る。と。は。敵。も。あ。ま。り。強

て逐えを。務減つりて寺中。小退投。歎び歎け。勢ハさる。あう。塚原  
 恒と丈夫。小搦成。ちと。と。歳多。尚。愈。敵山。一。帰。り。る。今日。ら  
 の合戦。小。浅井。頼。倉。高。家。の。士。八。百。余。人。歸。ま。る。が。坂。井。小。属  
 せ。織。田。勝。も。五。百。余。人。を。戦。死。さ。せ。り。河。加。勢。逃。る。遠。由。を。東  
 濃。ら。ま。る。小。う。信。長。ふ。く。歎。息。し。む。ひ。ま。ら。河。加。勢。の。退。道。小。自  
 軍。を。助。け。一。功。を。賞。し。て。區。く。小。後。賞。せ。る。是。亦。も。坂。井。右。道  
 が。忠。死。を。歎。く。是。先。日。森。可。成。が。戦。死。と。り。ひ。違。て。び。又。り。や。坂。井  
 右。道。忠。功。を。双。の。勇。士。多。し。が。早。く。も。亡。失。さ。る。緯。を。も。ぐ。も。口。惜。や。と  
 河。加。勢。小。む。せ。を。さ。る。新。也。も。果。げ。れ。事。ら。ざ。と。切。く。渠。門。が。總。衆  
 小。有。の。一。戦。と。な。さん。の。は。と。森。宮。將。を。信。ら。ま。山。上。の。敵。を。勾。引。せ  
 一。合。戦。と。し。た。計。汝。や。あ。と。訊。取。玉。の。本。下。腹。深。その。謀。計。を。さ。し。し。も

ゆらもぞ。然。も。群。卒。寒。寒。小。冒。され。困。窮。ま。る。こと。久。し。れ。ど。  
 長。く。對。陣。し。む。ふ。ハ。自。軍。に。た。め。小。失。利。な。ま。が。遂。少。の。敗。ま。を。仇  
 京。さん。が。退。陣。も。ま。ま。容。易。く。る。ま。し。然。と。て。山。上。へ。攻。登。ら。ん。こと。決  
 して。獨。利。の。道。を。う。ん。今。既。は。自。軍。の。陣。中。退。屈。の。色。を。顯。し。困。窮  
 の。態。は。ん。へ。う。と。方。術。を。と。て。敵。を。欺。け。掩。護。し。て。合。戦。あ。ら。ば。必。勝。の  
 利。を。得。る。あ。ら。し。と。信。計。ハ。新。般。と。や。り。と。併。く。の。ぞ。信。長。思。え  
 ぞ。逃。よ。り。奇。り。妙。り。遠。智。器。陰。小。秀。吉。ハ。神。なる。歎。死。な。る。歎  
 と。ぞ。歎。び。號。を。あ。げ。賞。し。て。休。ま。り。し。が。先。を。準備。さ。せ。を。や。と。諸。將  
 と。言。及。玉。ひ。り。を

繪本豊臣勳功記之編卷之拾 終

安政六年己未八月出版



編輯者東京櫻澤堂山  
畫工同 一勇齋國芳

出版人

大阪書林

岡田茂兵衛

東區博勞町四丁目

同

同

松邨九兵衛

南區心齋橋筋一丁目

發賣人

東京書林

山中市兵衛

芝區三島町

